

次の文章は、香川雅信『江戸の妖怪革命』の一節である（設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある）。読んで設問に答えよ。

近代とは、その「啓蒙の時代」というイメージとは裏腹に、妖怪が不可視の厚みを持った人間そのもののなかに居場所を定める時代、「内面」を抱えた「私」を土壌として生育する時代であった。そして、現代の人びとは、いまだにこの「近代」のなかにいるのである。

表向きは科学的・合理的思考が特権的な位置を占める世界に見えながら、その実われわれの周囲には、「霊」にまつわるさまざまなデイスクールが満ちあふれている。怪談、心霊写真・映像、スピリチュアルブーム、こっくりさん・・・テレビや雑誌、そしてインターネットなどのメディアを介して、そうした「物語」が今も大量に再生産され続けているのである。

現代人の多くは、「妖怪」と聞けば水木しげるの描く漫画のキャラクターを思い浮かべる。昭和四十三年（一九六八）、『週刊少年マガジン』誌上に連載されていた水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」がTVアニメ化されたことをきっかけに、突如として爆発的な妖怪ブームが巻き起こった。これにより、忘れ去られつつあった妖怪が多くの人

びとに認知されるようになり、その影響は現在にまで及んでいる。だが、もちろん誰も妖怪をリアルなものとしては受け止めていない。それは例えばミッキーマウスやドラえもんなどと同じような虚構のキャラクターであり、その意味で江戸時代の「化物」^{ばげもの}の正統な後継者であると言える。

いっぽう、幽霊に関しては、いまだになまなましく戦慄を覚える者は少なくないのではなからうか。学校で、職場で、あるいはインターネットの上でひそかに語り継がれる怪談のほとんどは、幽霊をめぐる話なのである。つまり、現代の日本人は、「妖怪」にはもはやリアリティを感じないが、「幽霊」はいまだリアルなものとして認めているというわけである。

だが、江戸時代の人びとは幽霊にそこまで特権的な地位を与えていたわけではなかった。妖怪に比べて幽霊のほうが格別にリアルだったというわけではなく、むしろ民間伝承の怪異としては、幽霊よりも妖怪の話のほうが圧倒的に多かった。そして、江戸時代の知識人は幽霊もまた狐狸^{こり}のたぐいの見せる幻にすぎないと言い切っている。「世に幽霊の取沙汰^{とりざた}多し。されども、人間一^{ひと}度死^{たびし}してふたたび形質^{かたち}を現^{あらは}さんや。是^{これ}ミな狐狸^{こり}の所^{しわざ}為なり」(『怪談見聞実記』)——一度死んだ者が再び姿

をあらわすわけがない。そんなものはすべて狐狸のしわざなのである、と。さらに『天狗通』^{てんぐつう}には、狸が幽霊^{たぬき}に化けるその方法さえ記されていた。ここには、リアリティの逆転というべきものがみられる。江戸時代の人びとにとっては、死者の霊が再び姿をあらわすよりも、狐や狸^{きつね}が人を化かすことのほうがはるかにリアルだったのだ。狐狸が化かすという話をおとぎ話としか思えない現代人にとっては、もはや共感することが難しい感覚だろう。

現代において、なぜこれほどまでに幽霊のリアリティのみが特権化されてしまったのだろうか。それは妖怪が「自然」に対する畏怖にかかわるものであるのに対して、幽霊は「人間」に対する恐怖にかかわるものであるからだと思われる。「自然」はコントロール可能なものとしてその神秘性を失ってしまったが、「人間」そのものは逆に見とおすことのできない暗い深淵^{しんえん}を抱えた不気味な存在として認識されるようになった。そうしたエピソードの変容が、近現代における幽霊の特権化の背後にあると考えることができよう。

問

傍線部A「現代の日本人は、『妖怪』にはもはやリアリティを感じない」とあるが、それはなぜか。五〇字以内で説明せよ。